



新橋町内会における 東日本大震災時の対応について



宮城県石巻市新橋町内会・自主防災会
会長 阿部 正敏

新橋町内会・自主防災会は、平成21年4月に設立され、ほどなく防災倉庫の設置と備品や備蓄物設置を申請し、整備が同年に完了、翌平成22年11月に町内会で初めての防災訓練を実施しました。約350世帯の高齢者が多い地域でこれと言った行事がない町内会でしたが、宮城県内では、30年以内にかかなりの高い確率で宮城県沖地震の発生が予測されると耳にしていたせいか災害に対する危機意識が高いことに気がきました。

その4か月後の3月11日、あの震災が発生しました。

震災当時を振り返ると、これまで経験したことがない長時間の揺れで、「とうとう宮城県沖地震が来たか」との思いで、テーブルの下に隠れました。揺れが収まり家屋の被害状況、ラジオの情報などを聞きながら、防災倉庫にあるヘルメットやハンドマイク、腕章などを取りに行き、



一時避難場所の宮城県石巻工業高校

マイクで町内の一時避難場所である宮城県石巻工業高校への避難を呼びかけました。

町内を見回すと、建物被害はほとんどなく、「避難訓練だと思って一応、工業高校に避難しましょう」と各家々をまわり、タンスや食器棚が倒れていたお年寄りの家で片付けをしながら焦ることなく落ち着いて誘導しました。

町内会の方々の避難は、自宅での垂直避難も含め地震発生から1時間ほどで終了しました。ただ気になる方が一人いました。酸素吸入をしながら寝たきりで病床に伏していた方が「御覧のような状況です。ここまで津波は来ないので私は避難しない」とはっきりと意思表示されたことから後ろ髪を引かれる思いで残して来ました。その後、これまで経験したことがない津波の襲来が沿岸部で確認されたことを知り、避難先で考え込んでいたが、工業高校の校長からの呼び出しの時、職員室の入口の壁に担架が掛かっていたのを発見、とっさに「これだ!」と即座に教員3人を連れ、残してきた方の家まで出向きました。有無を言わず担架に移し避難所へと向かう途中、思いもよらない方向から津波が襲来し、膝までつかりながら間一髪での救出劇となりました。

もしあの時、その方の言う通りをしていたら間違いなく津波で亡くなっていただろうし、私自身その後の震災対応は冷

静には出来なかったと今更ながら胸を撫で下ろしています。私なりに自主防災会が機能したとの自負を抱いた瞬間でもありました。結局、町内は、約1.5mの津波浸水。工業高校への避難者は、在校生、教員合わせて、190人、町内、通りすがりの方々800人、合わせて1,000人程度に膨れ上がり、3昼夜、避難生活を送ることとなりました。

自主防災会の方々にはヘルメットや、腕章を渡し避難者の対応にあたっていただきました。在校生、教員学校関係者は、学校長が責任者を、町内会、一般避難者は、私が責任者ということで避難生活が始まりました。

避難者は、赤ちゃんを連れた女性から老人、介護者がいる家族などでした。また、一時避難場所における避難生活は、不安と寒さ、空腹の中でした。食料品、水、毛布などはもちろんありませんでしたから、避難者の方々の健康状況については、まったく無防備でした。幸い、町内の病院の院長と看護師数人が急きよ、救護室を造って避難者の健康維持にあたっていただいたことは、1人の犠牲者も出さず、3日間の避難生活を送ることができた大きな要因です。

3日後、一時避難場所から避難物資がある避難場所まで避難が始まり、内陸の小学校、中学校や高校、大学へほとんどの方々が無事避難されるのを見送りました。その後4、5日程度、避難者7人程度が学校に留まり、次々訪ねてくる安否確認者の方々への情報提供などの役割を果たしました。



防災倉庫

改めて振り返りますと、私自身、偶然がいくつも重なり、そのひとつひとつの行動がよい方向に向かったことは間違いありません。自主防災会を何とか立ち上げ防災倉庫を確保したこと、半年前に避難訓練を実施したこと、震災当時、自宅にいたこと、偶然にも家族とメールがつながり安否確認ができたこと、避難場所に担架を見つけ、とっさの判断で重病患者の方を救助したこと、病院が近くであり医療確保が出来た事など、すべて繋がったことはとりもなおさず自主防災会設立が原点であったと思います。あの時、味わった教訓、被災して避難生活を経験した町内会だからできることなど、これからの自主防災会をどのように活性化していくか、あの時の体験を思い出しながら考えていかなければと思っています。

